けんこう処方箋

北海道対がん協会長　加藤 元嗣

胃がんの原因 ピロリ菌とは

胃がんの原因は「ピロリ菌」です。正確に言うと、「ほとんどの胃がんはピロリ菌が感染したことのある胃に発生する」のです。20年前と比べると、その名前は驚くほどに認知度が高まっていて、どこかで聞いたことがあるという人が、かなり多いのではと思います。ただ名前は知っていても、ヒトにどのような悪さをするか、ご存じでしょうか。

ピロリ菌は「ヘリコバクター・ピロリ」というのが正式な名称です。肉眼では見えない大きさ（1ミリの30分の1程度）のらせん状の細菌で人間の胃だけに感染し、犬、猫、豚などの胃には別の種類のヘリコバクターが感染しています。その話は別の機会に回すとして、大事な点は「ピロリ菌は人間の胃粘膜にのみ感染して、小腸や大腸など他の粘膜には感染できない」ことです。

そのためピロリ菌の感染様式は「胃口感染」と呼ばれ、ある人の胃に感染しているピロリ菌は、他の人の口から胃に入らないと感染が成立しません。現在では、ほとんどのピロリ菌の感染は、5歳までの幼少時に家庭内で起こっていて、成人になってから感染することは非常にまれだと分かってきました。子育て中の母親から、子どもに感染させるケースが最も多くなっています。

イラスト・佐藤博美

免疫や胃酸分泌の機能が成熟する前の幼少時に感染すると、生涯にわたって感染が持続します。途中で感染が消えることはまれです。日本での感染率は徐々に低下していて、今では30％ぐらいと推測されています。若い世代の感染率は低いのですが、高齢世代になるにつれ、感染率は高くなります。今の30歳は10％、65歳で50％、75歳以上で70％です。

ピロリ菌が胃に感染すると、胃粘膜に炎症が起きて慢性胃炎になります。最初の感染は胃の出口付近「前庭部」で起こりますが、感染はそこに留まらず、胃の上部「胃体部」へ進み、炎症を起こした胃粘膜は徐々に荒廃した萎縮性粘膜に変化していきます。最終的にはピロリ菌も住めないような状態になります。

そのような過程で、胃潰瘍（かいよう）、十二指腸潰瘍、胃ポリープ、胃がん、胃マルトリンパ腫（胃内リンパ球の腫瘍（しゅよう））などの病気を発症します。これらの疾患は胃粘膜の持続炎症をきっかけに起こるので、炎症を抑えることで治癒や発症予防できるのです。

すなわち、ピロリ菌を除菌する治療法が、こういった疾患の治療や予防に使われます。また、子どもへの感染予防のためには、子育てに関わる保護者だけでなく、祖父母などの除菌も重要になります。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。